吹かれて落つ 楡が木の葉の秋風に む男子の胸の内 つる芝草に

寮が窓越

し蔦の葉も

凋落正に秋深 散りしく落葉の数知れず

憂愁正に秋深しゅうしゅうまさ あきふか 路面覆える金色に

銀杏並木の夜歩きは いちょうなみ き よ ある 仄青白き月影の 小さき鳥の乱れ飛び

寂寥正に秋深 鳴るは心のため息い

か

梢を揺する秋風にこずえ ゆ あきかぜ 黄色く紅く色づきて

几

流れ落ちては地に吸われ 懊悩正に秋深 ぬぐいも切れずただ涙 ゆえだもあらぬこの悩み の底に滲み入りて